

茶の新害虫「チャトゲコナジラミ」の発生状況とその防除について

～急速に拡大中。大発生に要注意～

井手康人（豊田加茂農林水産事務所農業改良普及課）

【平成23年 12月16日掲載】

【要約】

茶の害虫チャトゲコナジラミは、愛知県では平成22年に豊田市ではじめて侵入が確認され、わずか1年後にその生息範囲は急激に拡大した。次年度においても更なる大発生が懸念されるため、①裾葉を重点的に狙った農薬散布、②冬期におけるマシン油乳剤の散布、③天敵に影響の少ない農薬の選択などの技術対策を推進し、チャトゲコナジラミの密度低減を図る必要がある。

1 はじめに

チャトゲコナジラミ（写真1：成虫、写真2：幼虫）は、愛知県では平成22年に豊田市ではじめて侵入が確認された。被害としては、本害虫の排出する甘露の上にカビが繁殖するため、葉のすす病が誘発される。また、一番茶期において大発生すると作業者が飛びまわる成虫を吸引して咳き込む等の問題も起こるため、特に手摘み園において大きな問題とされる。

農業改良普及課は、平成22年から平成23年に、豊田市におけるチャトゲコナジラミの発生活消長の調査を行ったので、その内容を報告する。



写真1 チャトゲコナジラミ成虫
(体長約1.2mm)



写真2 葉裏に寄生する幼虫

2 発生状況調査

(1) 調査方法

平成22、23年の各11月中旬に、チャトゲコナジラミ発生ほ場とその近隣のほ場57箇所について、裾葉10枚×6箇所の幼虫の寄生葉率を調査した。発生程度については、寄生葉率0%を「無」、0～30%を「少」、30～60%を「中」、60～80%を「多」、80～100%を「甚」と区分した。

(2) 調査結果および考察

平成22年では3箇所のほ場にのみ局所的に発生していたのが、わずか1年後の平成23年11月には47箇所のほ場にまで拡大した（図1）。

すす病などのチャトゲコナジラミ発生の兆候が一見して確認できないほ場についても、調査を行うと寄生率が想像以上に高い事例が多く見られた。以上のことから、実際は防除の必要があっても管理者が「防除不要」と認識するほ場が多く現れる可能性があるため、発生量調査に基づいた防除を推進する事が重要である。

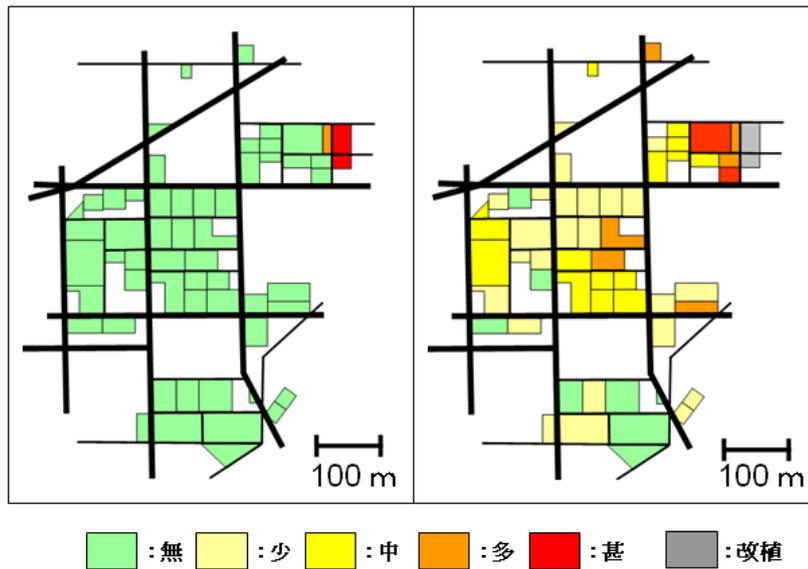


図1 チャトゲコナジラミ発生ほ場の推移（左：平成22年，右：平成23年）

3 防除対策

(1) 薬剤散布による防除について

本害虫の拡大防止のためには早期発見・早期防除が重要であるが、成虫は体長が小さいために密度が高まるまで発見が困難である（写真3）。また、薬剤防除のターゲットとなる幼虫は、主に裾の古葉の裏に寄生するため薬剤がかかりにくい。これらの特徴が、チャトゲコナジラミが難防除害虫として扱われる所以である。



写真3 大発生した成虫

農薬散布は整剪枝や裾刈りを行って薬剤をかかりやすくした上で、裾葉裏へと念入りに散布する事が重要となる。また、マシン油乳剤の散布を冬期に2回行うことで、翌1番茶期における発生密度を大きく低下できる事が知られているが、その一方でマシン油乳剤は赤焼け病を助長するので、幼木園や赤焼け病が発生しやすいほ場に対してはその使用について考慮する必要がある。

(2) 天敵を利用した密度低減について

チャトゲコナジラミにはシルベストリコバチという天敵が知られている。この寄生蜂はチャトゲコナジラミの密度が増加するにつれ、ほ場に自然に侵入・定着する昆虫と考えられており、寄生率25%以上でチャトゲコナジラミの顕著な密度抑制効果を示した事が報告されている。

しかしながら、豊田市におけるシルベストリコバチのチャトゲコナジラミへの寄生率をチャトゲコナジラミの脱出孔を調査することで確認した結果、寄生蜂特有の円形の脱出孔が見られたものは全体の1.0%のみであった。よって、チャトゲコナジラミ発生ほ場についてはシルベストリコバチの定着を促すために、寄生蜂に影響の少ない農薬を選ぶように配慮する。